令和3年度 厚生労働科学研究費補助金（認知症政策研究事業）

併存疾患に注目した認知症重症化予防のための研究

分担研究報告書

高血圧からみた認知症の有無と重症度の検討

研究分担者 山本浩一 大阪大学大学院医学系研究科 老年・総合内科学 准教授

研究要旨

認知症低下に無自覚な高血圧を有する65歳以上外来通院患者312人のデータを用いて解析した結果、軽度認知機能低下相当は35%で認知症相当は7.7%で認められた。多変量解析では年齢とIADLの低下が認知機能低下の独立した関連因子であった。

A. 研究目的

本研究では、65歳以上の高血圧患者で、過去に認知機能障害と診断されていない高齢高血圧患者を対象に、認知機能障害や認知症相当の比率とその規定因子を明らかにすることを目的とする。

B. 研究方法

（大学や国立）6病院に通院中の高血圧患者312人を対象とした。認知機能はMMSEで評価し、認知機能障害と認知症相当の認知機能低下をそれぞれ27点以下、23点以下とした。筋力や基本的ADL、手段的ADL(IADL)、高齢者うつスコア(GDS)などを同時に評価した。また診断されたMCIの患者データベースであるオレンジレジストリの中で高血圧を有する登録者を抽出し比較検討した。

（倫理面への配慮）

研究計画は各施設の倫理委員会で承認され、参加者から書面上の研究同意を得た。

C. 研究結果

312名のうち、35％（n＝109）および7.7％（n＝24）が、認知機能障害および認知症を有していたことがわかった。認知機能障害のある患者は、高齢で、教育年数が少なく、IADLが低かった。重回帰分析では、年齢とIADLが高血圧患者の認知機能障害と関連していた。診察室血圧と家庭血圧値、降圧薬数、降圧薬の種類は認知機能障害のある患者とない患者で同等であった。認知機能障害のある患者は、オレンジレジストリの高血圧患者と比較して、降圧薬数が多くIADLが保たれていた。

D. 考察

本研究から高齢高血圧患者は診断されていない認知機能低下が高率に潜在することが示唆される。本研究の参加者を縦断的に解析することで、認知機能低下を有する高血圧患者の診療に資する知見が得られることが期待される。

E. 結論

高齢高血圧患者は、機能的に自立していても、認知機能低下が隠されているリスクが高いことが示唆される。

F. 健康危険情報

該当なし

G. 研究発表

1. 論文発表

Clinical characteristics of older adults with hypertension and unrecognized cognitive impairment
Hypertens Res.2022;45(4):612-619.

2. 学会発表

高齢者高血圧患者における潜在的な軽度認知機能障害（MCI）の実態
第63回日本老年医学会学術集会

高齢者高血圧患者における潜在的な認知機能低下と関連因子の検討
第43回高血圧学会総会

H. 知的財産権の出願・登録状況
（予定を含む。）

1. 特許取得
2. 実用新案登録
3.その他

いずれもなし。